

「春の法要」(4月13日~15日)の最終日となる4月15日、立教開宗記念法要の後、ご門主が『浄土真宗のみ教え』についての親教を述べられた。そこで、徳永一道・勸学寮頭に「ご親教をいただいて」と題して執筆いただいた。

ご親教をいただいて

勸学寮頭 徳永一道



本紙5月1日号に、去る4月15日に本山・御影堂で勤修された立教開宗記念法要において、ご門主が「浄土真宗のみ教え」についての親教を述べられたその全文が掲載されている。

その骨子は、浄土真宗の教えの根幹が南無阿彌陀仏の名号にあり、この名号が「生老病死」という四苦のただ中にある私どもの人生の最終的な依りどころとなるということであった。

われであり、それを信受することが同時に私どもの救われるすがたでもあるということにほかならない。既述のように、このご親教において、ご門主がわれわれに伝えようとした親鸞聖人の教えの根幹は、南無阿彌陀仏の六字の名号にあり、さらにそのはたらきは聖人が明らかにされた法義のエッセンスである「自然法爾」の四文字につくされるということである。

「ご無礼ながら、このことについて蛇足になることを承知の上で、私の理解するところを述べさせていただきます。『高僧和讃』善導讃の一首の、

信は願より生ずれば
念仏成仏自然なり
自然はすなはち報土なり
証大涅槃うたがはず

(註釈版聖典592頁)

生浄土という究極のゴールへと向かわしめるはたらきでもあるといえよう。そしてまた、その究極の到達点であるお浄土がまた「自然法爾」の世界であるということになる。親鸞聖人はこの「自然法爾」を阿彌陀如来の救いのはたらきのサイクルとして、お示しくくださったことを上記の和讃をもって私どもに伝えんとされたのであろう。

これはまた、ご親教において「浄土真宗のみ教え」としてお示しになったところであると言ってもよいと思われる。すなわち、私どもの称える念仏が「そのまますま救う」という如来さまの願いであり、同時にそのよび声でもあるということでもある。その如来さまの願い、すなわちご本願におまかせすることこそが、私ども人間の究極の依りどころとなるのではなからうか。親鸞聖人はそれをもって他力の信心の内容とされたのである。

まことに私どもの人生には予断が許されない。今や世界中に蔓延してしまったこの新型コロナウイルスの災厄を、いったい誰が予測し得たであろうか。目にすることもできないほど微少なウイルスが、まさに世界中を混乱の極みに陥れたと言えらるが、そのただ中において自らの人生にいかに対処していくべきかは私ども自身の問題である。

私どもは幸いにして弥陀の本願の教えに遇うことができ、それをもって自らの人生の礎とすることができ、それが縁に恵まれている。それをもち現代の人間の課題、世界人類の行く末についてまで思いをいたすこともまた、私ども念仏者の責務ではないかと思われるのである。